

2016 年度第 3 回研究会の報告

日時：2016 年 10 月 15 日（土）14 時から 17 時
会場：戸山キャンパス 33 号館 6 階、第 11 会議室

このたび開催された「信頼社会」研究の 2016 年度第 3 回研究会では、参加者約 20 名とともに、二つの話題提供と質疑が行なわれた。話題提供者は、松永美穂先生（本学教授）と森由利亜先生（本学教授）である。

松永美穂先生（本学教授）「作家 VS メディア？－E. イェリネクの場合」のまとめ

オーストリアの女性作家エルフリーデ・イエリネクは、民族の恥部を告発する挑発的な主題選択によって、初期の段階から保守的なマスメディアの攻撃を受けてきた。彼女はドイツ語圏の文学や思想史における「わたしたち」の言説を誇張しパロディー化する戯曲（「雲。家。」）によって、他者を排除しようとする閉鎖的な思考を批判するとともに、「バンビランド」ではイラク戦争に関する報道に切り込み、さらには福島原発やヨーロッパに流入する難民の問題にまで視野を広げ、「光のない。」や「庇護を委ねられた者たち」といった作品において、弱者に言葉を与えるための「わたしたち」という発話にも挑戦し続けている。本発表においては、そうした彼女の手法を分析しつつ紹介し、きわめて現代的なテーマがギリシャ悲劇と結びつけられていることの意味についても考察した。（松永先生記）

森由利亜先生（本学教授）「伝統的中国思想と良心の自律—信頼社会の基礎としての普遍的良心の想定可能性」のまとめ

「信頼社会」をめぐるキーワードを、アジアの伝統社会から提供できないかということを考えている。前回、「信」が身分差に還元されない朋友の関係をモデルとしていることを考えた際に、「信」の前提として当事者の自律性が重要であることにも話が及んだ。今回は、中国の封建社会において意識的に探究された自律の理論として、儒家の性善説を取り上げる。一般に、家や国の封建的な制度や形式に固執する儒家は、およそ自由からはかけ離れた抑圧空間の奉仕者でしかないようにも見える。しかし、そのような制度や形式に固執する知識人の意識に、「自律」の理論が用意されていることは注意に値する。刑罰を伴う「法」が、「恥」という良心の疼きとは無縁の、自己の外部にある規範によって正義を律するものであることを強く意識したであろう孔子は、自己自身の決定によって正しさ（仁）を実現できることを言い、孟子は善を判断する能力を「内」なるものであると言明した。それが性善説のキモである。朱子学や陽明学のような近世儒教の探究も、内在する自己の判断力（知）をどのように正当に行行使するかに向けられた。儒者たちが身分差や制度的な抑圧から最も解放された朋友の関係（「信」の関係）に関与するとき、バックグラウンドに起動している「自律」が最も鮮明に彼らの間に露出するのかもしれない。（なお報告時に触れなかったが、性善説に見える独立のメンタ

リティの成立基盤を、国の容喙を許さない家（宗族）の独立性のうちに求めた論として中国古代史家の板野長八『中国古代における人間観の展開』岩波書店、1972 が注目される。）（森先生記）

次回の研究会は、シンポジウムとして 12 月 3 日（土）、33 号館第 10 会議室において開催される。当日は、クリストフ・シュリンゲンジーフ監督による映画「外国人よ、出て行け！」の上映とこの作品をめぐって松永美穂先生（本学教授）他が討議を行う予定である。（報告書とりまとめ：御子柴善之）